

明治大学現代マンガ図書館における企画展の変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2018-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19405

明治大学現代マンガ図書館における 企画展の変遷

西 智子*

1. はじめに — 現代マンガ図書館の概要 —

「現代マンガ図書館〈内記コレクション〉」は、1978年に貸本屋兼マンガコレクターであった内記稔夫が自身のコレクションを基に設立した、日本初のマンガ専門図書館である。貸本マンガ・単行本・雑誌など戦後の発行物を中心に、マンガとマンガに関連する様々な資料を収集・保存しており、蔵書数は約18万点に及ぶ。

2009年に蔵書を明治大学へ寄贈し、それに伴い名称を「明治大学現代マンガ図書館」に変更。現在は新宿区早稲田鶴巻町で運営しているが、明治大学が開設予定である「東京国際マンガ図書館（仮称）」に蔵書を移管することが決定している。

現代マンガ図書館では1年ごとに企画展を行っている。毎回特定のテーマを設け、それに関係のあるマンガを可能な限り全て蔵書から掘り起こし、その表紙を一斉に展示するものである。この企画展は明治大学の施設になる以前から継続的に開催されており、本稿ではその活動内容の詳細を報告する。

*にし・ともこ／明治大学現代マンガ図書館〈内記コレクション〉

2. 企画展の概要

2.1 歴史

現代マンガ図書館の設立後、程なくして内記稔夫館長の手によって企画展の定期的な開催が始まった。最初は数か月ごとに書庫から蔵書を引っ張り出し、展示棚に並べるという単純なものであった。狭い館内には展示出来るスペースが無いため、天井の梁にアクリル板ブックスタンドを取り付け、そこにマンガを差し込んでいた。しかし本の重みで壊れるので、防犯も兼ねて、現在は表紙をカラーコピーして厚紙に貼り付けたものをアクリル板に差し込んでいる。

やがて、展示作品に作品データを記したキャプションを添付するようになる。最初は作品名と作者名のみであったが、2000年代以降は全ての作品に詳細な初出情報を付記するようになった。初出を付するようになったのは、年代順に展示する際に、正確な発表順を把握するために調べ始めたのがきっかけである。マンガ単行本には初出を載せていないものが多くあるが、当館所蔵の雑誌バックナンバーを並行して調査すると、発表年月日が正確に判明する。

また、開館当初から比べると、調査点数は年々増加傾向にある。館内のスペースに限界があるため、最大でも200点程の展示になるが、データとしてリストアップする作品点数はその数倍に及ぶので、展示の補足として小冊子を制作したり、学会に作品リストを発表するという活動も行っている。

2.2 展示の特徴

- ・「アイドル」「医療」「西遊記」等、ある特定のテーマについて描かれたマンガを蔵書の中から収集し、表紙を一斉に並べて展示している。展示作品数は1回につき約100～200点。発表年順に並べるのが基本スタイルだが、集まった作品群を見てみて、小ジャンルごとに分けて並べた方が展示としてより相応しい場合はそのようにする。
- ・展示作品のほとんどは現代マンガ図書館の蔵書内から収集する。2000年代以降の単行本はまだ配架されていない作品も多いが、その場合は単

行本の代わりに、雑誌に掲載された号を展示している。

- ・キャプションは基本的に作者名、作品名、初出情報を記す。展示内容に伴って付加情報を記すこともある。
- ・企画展を行うにあたって難しいのは、テーマに基づいて集める作品の範囲である。「〇〇マンガ」とひと口に言っても、そこから想起される作品は個人によって大きく異なるからである。そのため、当館では、該当作の漏れを極力防ぐという方針の基に、「〇〇マンガ」が指し示す所の定義を極力広義に捉えて収集し、且つ、館内スペースが可能な限り展示するという策を取っている。具体的な定義の定め方や展示方法は、次項に詳述する。



図1 展示の一例 (2011年 ご当地マンガ展より)

3. 各展示を振り返って

ここでは、当館で展示データが残っている2004年以降について詳述する。2003年以前の展示は、表紙コピーなどの展示物のみを資料として保管している。

3.1 「西遊記マンガの名作展」(2004年)

「あずみ」や「Dr. コトー診療所」など、マンガ原作の映像作品が流行し

ていた世相を反映し、映像化マンガ展を行う予定であった。しかし、内記稔夫館長の「今年は申年だから西遊記マンガ展をやるよ」という発言により、変更。西遊記や孫悟空をモチーフに取り入れた作品は全部で約100点集めることが出来た。

3.2 「終戦60周年記念 戦記マンガ特選展」(2005年)

主に、戦後に発表された戦記マンガを収集した。展示では主要な作品約170点を紹介したが、当館で調べ得る限りでは約860点の作品が集まった為、展示とは別で詳しくリスト化し、日本マンガ学会において内記稔夫が発表を行った。

3.3 「ワンちゃんマンガのワンダーランド展」(2006年)

一昨年の西遊記マンガ展に引き続き、戌年という理由で犬マンガの展示に決定。犬の登場するマンガを全て集めると作品数が膨大になり收拾がつかないので、犬が主要な登場キャラクターである作品、もしくは物語において犬の存在が重要な作品を選別。キャプションにおいては、作品内に登場する犬の画像と説明文を、初出情報と共に展示した。

3.4 「グルメ・料理マンガのフルコース!展」(2007年)

展示のテーマが“マンガにおける味の表現手法の変遷”であった為、バーや食堂が舞台だが物語中で飲食に関する描写の無い作品は除外した。また、藤子不二雄作品における“小池さんのラーメン”などに代表される、局所的に食べ物描写が登場する作品も除外。その結果、約300点のグルメマンガが集まり、その内の代表的な約170点を展示した。2007年当時においては、かなり高い割合で日本のグルメマンガリストを網羅したと思われるが、その後グルメマンガの発刊点数は爆発的に増えていき、現在はリスト化しようとしても追い切れない状況である。

近年グルメマンガが増えていった背景には、ジャンルの細分化による表現の幅の広がりがある。展示ではその点に注目し、「中華」「お酒」「スイーツ」「思い出の味」等に分けて展示した。

3.5 「音楽マンガの祭典 コマから聴こえるハーモニー展」(2008年)

「のだめカンタービレ」が大ヒットし、「音はマンガで表現し辛いので音楽マンガは売れない」と言われていた時代が終わった。そうしたマンガ界の変化を受け、戦後の音楽マンガはどのようにして音を表現してきたのか、改めてその変遷を辿るべく、音楽マンガを収集するに至った。

しかし、音符マーク等による音の表現はあらゆるマンガに登場してくるため、何を以て「音楽マンガ」と定義するか、その線引きに最も苦勞した。現物を見ながら検討を重ねた結果、明らかに音楽がテーマである作品や、音楽のシーンが頻出する作品を中心に集め、線引きの微妙な作品に関しては、音の響きをマンガで独自に表現しようとする工夫がみられるかどうかを「音楽マンガ」か否かの判断基準にした。そうして集めた作品約200点を展示。展示に収まりきれないデータも含めた約430点はリスト化し、小冊子にして販売。後に、小冊子を参考資料にして音楽マンガのムック本が出版されたこともあった。

展示では「クラシック」「オペラ」「ロック」など音楽ジャンルに大別して掲示した。「ピアノ」ものと「バイオリン」ものに関してはジャンルを超えて多様な作品が発掘されたので、分けて展示を行った。

3.6 「医療マンガ傑作選 マンガの名医を集めて展」(2009年)

かつては手塚治虫「ブラックジャック」のヒットに端を発した医療マンガも、現在は「ブラックジャックによろしく」「動物のお医者さん」等をはじめとしたマンガ界の一大ジャンルを築いている。実際に探してみると約270点の作品が収集され、その内の約170点を展示した。「外科」「内科」「産婦人科」「精神科」「獣医」など診療科別に分けた所、ほぼ全ての科を網羅でき、医療マンガの多様性を明らかにした。

3.7 「ぼくらのまんが道 漫画家マンガおもしろ展」(2010年)

2009年、15年にわたって連載された辰巳ヨシヒロの自伝「劇画漂流」が手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞。これまで広く知られることのなかった劇画史の黎明期に光が当てられた。またこの年は、同時多発的にいろんなジャ

シルのマンガ家が自伝マンガを発表した時期でもあり、それらが漫画家マンガ展を開催する契機となった。

当展示で集めた作品を大別すると「自伝」「フィクション」「マンガがテーマではないけれど、登場人物にマンガ家が出てくるマンガ」となった。エッセイマンガは今回のテーマである「漫画家について描かれたマンガ」に該当しないので除外した。自伝マンガとエッセイマンガの線引きが難しかったが、作品内でマンガの執筆そのものについて言及されている分量を基準に選別した。また、漫画家マンガを探していく内にまとまった数の「物語内に登場する架空マンガ」が集まったので、それらをまるで実際に存在した作品かのように展示する試みも行った。

3.8 「マンガで日本一周！ご当地マンガ大集合展」（2011年）

ご当地グルメ、ご当地キャラ、ご当地アイドル等のいわゆる“ご当地もの”が全国的なブームになり、それなら「ご当地マンガ」を集めてみようという発想で行われた企画である。タイトルや作品内で物語の舞台の地名が明記されているものや、明記されていないが舞台設定や作者の出身地からモデルとなる地域が明確に推測できる作品を「ご当地マンガ」と定め、47都道府県全ての作品を集め展示した。

基本的に現代マンガ図書館の企画展は、まず書庫から丹念に該当作をかき集め、集まった中から作品の傾向を探り、ジャンル分けして展示する。しかしご当地マンガ展の場合、都道府県別に分けて展示するというアイデアが先にあったので、集まりやすい県と全く見つからない県が両方あり、全都道府県を等しく網羅するのに苦労した。最終的には各県につき2～4作品を選別し、具体的な地域も可能な限り推測して、白地図と共に展示した。

スポーツマンガとヤンキーマンガは、学校名やチーム名に伴って様々な地名が頻出するものの地域性のみられない作品が多い為、「ご当地マンガ」とは別物と捉え、一部の作品を除いて展示からは除外した。

3.9 「ドキッ！アイドルだらけのマンガ大会～Weラブアイドルマンガ～」 (2012年)

全国的なアイドルブームを受けて行った企画。

歌手・バンド・俳優が登場する作品には「アイドル」と明記されていないものも多かったが、内容を一見するとアイドル的な描かれ方をされているかいないかが比較的容易に判別できたので、アイドルマンガの基準設定は明確に行わなかった。また、1970年代以前は「アイドル」という用語が世間に浸透していなかったが、代わりに頻出する「スター」という言葉をアイドルの前身と捉えて、リストの一部に加えた。

細かいジャンル分けはせず、全作品を発表年順に並べて展示したが、第一次アイドルブームの起きた1980年代の作品が最も多く集まり、逆に「アイドル冬の時代」と言われた1990年代はアイドルマンガをあまり見つけられなかった。世間の流行が如実にマンガに反映されていることを最も強く感じられた展示である。

3.10 「発表!! 閲覧数ランキング——現代マンガ図書館 30年間のデータから——」(2013年)

2012年6月、当館の設立者である内記稔夫館長が死去し、同年10月より米沢嘉博記念図書館にて「内記稔夫～日本初のマンガ図書館をつくった男～」展が催され、現代マンガ図書館に関わる様々な資料を新たに作成し、展示した。そして、その内の一つであった「作者別閲覧数ランキング」のデータを膨らませ、例年の企画展として翌年に発表した。

過去30年分の日誌から閲覧データを全て計上し、男性マンガ家・女性マンガ家に分けて閲覧数の多い作者ランキングを年代別に展示。日誌には閲覧された単行本の作者名しか書かれていないので、展示ではその作者の作品群の中で当時最も多く読まれたと思われる代表的作品を掲示した。

また当館では、単行本未収録作品や、単行本化するにあたり中身が描き直された作品等を求めて、雑誌のバックナンバーを閲覧希望する利用者が多い。日誌には閲覧された雑誌名しか記録しないため、雑誌上で多く読まれた作品のデータを正確に集計することは出来なかった。しかし当館でよく読まれている作品という点において本展示から除外する訳にはいけないので、現代マンガ図書館スタッフの記憶を頼りに、雑誌上でよく閲覧される作品をリストアップし、単行本ランキングと共に展示した。

3.11 「創刊60周年記念 りぼん&なかよし 歴代の表紙絵展」(2015年)

1年につき各誌1冊ずつ、当館の蔵書から出し得る計111点の雑誌を年代順に並べて展示した。

両誌ともに、創刊当時を除いてほぼ全ての号で連載作品のイラストが表紙のメインになっているので、同じ作品の表紙がかぶらないよう、当時の人気作品を調査し、各年で代表的作品の表紙絵を選ぶことにした。この展示は反響が大きく、利用者の子供時代と照らし合わせることで幅広く楽しんで頂いた。

また時系列で表紙を並べることで、少女マンガにおける流行の絵柄やデザインレイアウトの変遷、雑誌ふろくの進化、印刷技術の向上などがはっきりと見てとれたのもこの展示の特徴となった。

3.12 「まだまだ続く!! 大長編マンガ——人気シリーズ勢ぞろい——」(2016年～)

「こちら葛飾区亀有公園前派出所」の200巻達成を記念して行った。

「長編マンガ」とひと口に言っても、「こち亀」のように発刊単行本数の多い作品もあれば、掲載ペースは遅いが長期間連載している作品、あるいは続編やスピンオフといった形でタイトルを変えながらシリーズ連載を続ける作品など、「長編」の定義は多岐に渡り、一括りに並べることが出来ない。ゆ



図2 「まだまだ続く!! 大長編マンガ——人気シリーズ勢ぞろい——」展の様子

えに、それらを別々に分け、それぞれ発刊巻数や連載年数でランキング化した。

また番外編として、「サザエさん」「ちびまる子ちゃん」「クレヨンしんちゃん」等、マンガよりアニメの長寿作品として広く知られている作品や、「ドラえもん」「聖闘士星矢」など、オリジナル版作者の弟子達がキャラクター設定を引き継いで別ストーリーを描いている作品等も併せて展示している。

4. おわりに

現在、国内にマンガ専門図書館は数多くあるが、その中における当館の大きな特徴は、収集範囲をあえて定めず、広く「マンガ」と呼ばれるものとその関連物を、入手できる限りにおいて全て収集し、半永久的に保存するという方針にある。

企画展はそのような当館の特徴を最大限に活かしている。特定のテーマを扱ったマンガ作品を、悉皆的に書庫を資料点検するようにして集め、年代順に並べるという単純な展示であるが、ある一つのテーマのみに従って大量に資料を出すことで、自然と炙り出されるマンガ文化の傾向や世相を、どの展示からも見受けることができる。それはひとえにマンガが、時代の流れに柔軟で、その時その時の世相を即座に反映するメディアだからである。

今後「東京国際マンガ図書館」（仮称）が設立された際は、様々な時代の趨勢をマンガという側面から体系的に研究・調査することが容易になる。当館の蔵書がその一助となれば幸いであり、また移管後、これらのような企画展をよりいっそう充実した形式で行うことが出来ればよいと考える。